立藤という名前の由来を訊いた日、父母は交通事故に巻き込まれて死んだ。答えは聞けなかった。俺は、調べなかった。両親の口から聞きたかった。いつになっても。

花のある場所で待ち合わせをするのが恒例となっている。それは果樹園の前だったり、公園だったりする。今日はダリアの花壇の前で、という話になっている。

後ろに立つ時計を見る。待ち合わせの時間よりまだ十分早い。鞄から本を出し、立ち読む。これもいつものことだ。彼女はだいたい毎回時間丁度に現れる。

今日は三分早かった。

「や！　おまたせ！」

「おはよう。別に待ってないよ」

花美は名前にぴったりの笑顔を咲かせた。つられて、自分の顔も若干ゆるむのを感じた。

彼女は白いワンピースを着ている。

「……」

「なに？」

訊かれこそしたが、花美はまるで俺が何を思っているかを見透かしているかのようだった。自信たっぷりのその顔は俺が彼女を気になるキッカケのひとつだった。

「よくもまあそんな似合うなあ」

「言い方」

指摘しながら彼女はまた違った笑顔を浮かべる。それは正に呆れ笑いだった。それでもそこに喜色があるように感じるのは俺の勘違いではないはずだ。

「でも本当のことだからなあ」

俺は黒のスラックスに白のワイシャツという地味な服装だ。

「今日はいろいろと服見に行こ」

そう、今日の逢引の目的は俺の服選びだ。

俺はあまり服に関心がない。今着ている服だって他人との差別化を図るために着ているわけではなく、ただ楽だしちゃんとしているふうに見てもらえるからだ。高校までラグビーと勉学のみに注力していたから、服装は暑ければ半袖短パン、寒ければその上にジャージ、というものだった。ジャージは学校指定のもので、半袖は菅平のおみやげTシャツだった。大学に進学するとなればそうはいかなくなることは、怪我によって部活実績による進学が難しくなった時点でもうわかっていたが、勉学に注力しなければならなくなってしまった俺に、服装に関する知識や関心を蓄える暇は無かった。それに、父母の保険金をそんなことに使ってしまうことに拒否感があった。

一方の彼女は様々な服を着こなしている。髪は長いが、定期的に髪型が変わるので印象が固まらない。新鮮に感じる日が多く、羨ましいと思った。

先日に、そんな彼女に羨ましがるようなことをぽつりと漏らしたのが、今回の逢引の発端だ。

とりあえず歩こっか、と花美に促され、隣に並んで歩く。俺よりもだいぶ背の低い彼女の歩幅は狭く、ゆっくりと歩く必要があった。もうずいぶんと慣れた。

見上げられながら訊かれた。

「こういう服が着たい！っていうのはないの？」

「ちゃんとしつつ、近寄り難くないような、……そんな服装かな」

俺はあまり目つきがよろしくない。そして背が高く、だいぶ筋肉質だ。そこに無口が付随するとほとんど誰も近づいてこなくなる。どれだけ人が溢れかえっている教室でも、俺の横には誰も座らないことがままある。俺の横に普通の顔で座ってきたのは男でもあまり多くない。女子に関して言えば隣を歩くこの一人だけだ。。

「ちゃんと考えてたんだ。意外！」

……意外か、たしかに意外かもしれない。

「服装を変えればもう少し怖がられずに済むかもしれないからな」

「そうなったら私もうれしいな」

「……そうか」

なんて返せばいいのかわからず、ちいさくつぶやいた。花美は言葉通りの表情をこちらに向けていた。視界の隅になんとなくその顔を映しながらも見てみぬふりをした。照れ臭かった。

「それで、何かいい服屋はあるのか？」

照れ隠しも含めて訊いた。

「うーん、どうだろう？」

「え？」

「まあいろいろ見ていこうよ、お昼だってまだだしさ」

「ああ、そうだね」

「夜だって一応空けてるし、私はいくらでも付き合うよ」

「……」

そんなことを言われて不埒なことを考えずにいられる男はいるのだろうか。

夕方。紙袋を持って駅中を歩いていると不意に花美が立ち止まり、言った。

「ハピナスだ」

「……あの淡い紫のやつ？」

「そうそう、あれ」

店先に並ぶそれに歩み寄り、店員に声をかけて手に取ったそれをこちらに向けてくる。両手はふさがっているので顔を寄せて香りをかいだ。いい香りだ。

「これ、好きなのか？」

「ふつう」
ふつうか。
「これ、立藤とも言うんだよ」
「……同じ名前だな」
「だね」
自分がどういう顔をしているのかわからなかったが、彼女は俺の顔を見つめ、語り出した。
「日本では観賞用だけど、地中海では種子がルーピンマメって言われて食用にもされてるんだよ。名前の由来はラテン語のルーパスからきてる」
「ルーパス……たしかオオカミの意味だったよな」
「そう！　正解！」
花美には弟でもいるのだろうか。たまに幼く扱われているような気がする。しかしそんなことはいまさらどうでもよく、今はいつかの質問への不意な返答を聞く機会を逃したくなかった。
「なんでルーパス？」
「荒地でもたくましく咲く姿がそう見えたんじゃないかな。ほら、オオカミって孤高で強かじゃない」
こころなしか、じわりと胸が熱くなった。目頭がかすかに熱くなった。
「なるほど……」
なにも流さなかったが。
「もしかして立藤の名前の由来だったりしてね」
「そうだろうな。そうだったらいい」
「訊いたことないの？」
「ああ」
両親が他界していることを言ってはいない。言わなくても済むことはわざわざ言わなくていい。だから余計なことを勝手に答えなかった。
「……ふぅん」
「花美の名前の由来は何かある？」
「文字通り、『美しい花のように育ちますように』っていうことらしいよ」
「……花のように美しく、じゃないんだ」
「花は……というか植物は美しさ以上に強かさがすばらしいんだって」
おそらく両親の言葉をそのまま口にしていた。
「なるほど、それじゃあご両親の願いは叶ったってことか」
「……えぇ？」
花美は明らかに困惑しながら顔を赤くした。正しく花のようだった。
俺は、直接的な物言いがあまり好きではなかったので、良い機械を得られた。